

沖 発行所

推敲跡。於村研

登

几

郎

に

師

系

Ш

脈

 $\sqrt{|}$

春

凪

俳人・能村登四郎の水脈

展

冬

日

さ

す

生

原

稿

に

推

敲

跡

か し を り

咳

7

背

後

ょ

り

抜

義

士

0)

日

0)

妥

協

許

さ

め

会

議

あ

り

拶をいただいた、今回の文化勲章受

た。祝賀会の来賓として一番にご挨

くことが出来たこともうれしかっくの会員、お客さまにお越しいただようだが、何とか足元の悪い中を多

には雨脚が強くなったこともあった

沖晴れ」に勝るもの

役員の集合は午前中早かったので、 レッテルを張られそうだと思った。 れの一日となるはずで、この時期を 月の終わり頃は天気も安定して秋晴 せたいという連絡も入ってきた。 通機関が心配なので行くのを見合わ と心配であった。会場にも何人かの ただく五時頃雨脚が強くなるのでは 受付をする昼頃、お客様がおいでい が出来た。しかし、会員の皆さんが 小康状態の間に会場の中に入ること 中、これではどうも私自身が雨男の ることになったが、会場に向かう途 で、天気予報を気にしながら出かけ 指した台風の直撃予想。ぎりぎりま 設定したのだが、珍しくも東京を目 念会では、それが効かなかった。十 となるのだが、今度の四十周年の記 てよいほど誰もが口にする「沖晴れ」 会員やお客様からも電話があり、交 会場となった市ヶ谷周辺も一時的 一沖」の行事を行う時は必ずと言っ

語ること供養となりぬ冬オリオン

プライバシー保護の過剰や冬ざるる

用に引用かさね冬旱

引

葉引き出す鬼火より

検

索

0)

言

道攻めといふ商ひ歳の市

歩

で、この日が絶対に、 で、この日が絶対忘れられない日にで、この日が絶対忘れられない日にで、この日が絶対忘れられない日になるだろう」という励ましのお話もなるだろう」という励ましのお話もた。こんな悪条件の中を三百人を越た。こんな悪条件の中を三百人を越た。こんな悪条件の中を三百人を越た、私にとっては「沖晴れ」に勝るは、私にとっては「沖晴れ」に勝るものを感じることが出来た。

会回の四十周年記念事業、実行委会のスタッフの皆さんと二年越しの準備を重ねて、この日を迎えることが出来たわけで、スタッフの献身的な力も頼もしかった。今回は、ご出席いただく会員の皆様お一人お一人に私の書いた短冊を差し上げることにした。スタッフの方々には心配をかけたが、大会の二日前に全部ををかけたが、大会の二日前に全部ををかけたが、大会の二日前に全部ををかけたが、大会の二日前に全部ををかけたが、大会の二日前に全部をといただることが出来たのもうれしかった。



手

と

足

が

瞬

に

空

切

る

寒

き

朝

峡 0) 子

鳥

威

と

は

奇

を

7

らふ

物

ば

か

り

露

眩

け

Z

自性院開創一、

縁

善

昭

池

 \mathbb{H}

崇

棒 Ł 稲 鳴 架 子 0) O引 き 役

に

露

身

法 代

筵 先

に 花 胆 子 展 に O菊 離 0) L 伊 7 7 呂 細 波 まる 心 鬼 0) B

ま

雀

聲

0) 7 歴

黄 0)

あ

ま

た

飛

遂 大

菊

腰 峡

砕 0)

け

な は

る 今

子

を 教 は 1

0

わ 衆

1

を

Ł

7

古

刹

五.

+

世

芋

干

す B ベ

僧 明 に に

0)

譜 秋 み 烈

曲

唱 0)

和 蝶

さ

B

け 컿

荒 井

窯

0)

を 岸

深

め

7

黍

あ

5

つ 変

<

り

と

押

す

う

ほ

鷹

る

耶 0)

蘇 哀

ζ

花

V

負

S

紐

0) 紺

擦

れ

L

胸

0)

辺

水

0)

秋

気

図

が

5

h

とける

酷

暑

か

7 0)

虫

0

音

ょ

ょ Ł

透 秋 秋

き

通

る な

待

思 と

な

潮

照

り

銀 葛 潮 ゆ

漢

B

を

僧

ま

ば

老

早

蓑 杖 玉 パ 露 天

虫 0) 子 ソ 隘

0

頭

で

つ ス h 動

か

世

を

0)

ぞ

Z

母 豆 コ り

コ

ス Š 0)

モ る 起

ょ

り ち

> ŧ 5 る

揺

ぎ

を

n

腐

と

盛 5

る る

ŧ か

裏 照

葉 り

島 0)

史 墓

を

聞 づ

き 0)

を

れ 拼 渡

ば

千 佐

代

透 き 通

る

田

所 節 子

師 0) お 座 3 進 大 会 め が あ る 8 畑 ば る り

吉 \mathbb{H} 政

江

蛇

指

図

消 契 秋 鵙 準 期 高 備 約 天 ゴ 作 音 万 B を \mathcal{L} と 朝 端 0) 白 市 見 か 角 台 紙 ケ 紛 5 بح 風 れ に 谷 う 指 0) てを 7 义 戻 堀 逸 を さ 0) り L れ れ り 文 雁 7 穭 さ 化 渡 面 伸 う を 0) 鏡 ぶ な 日 り

出 正 作

新 着 踏

ば

L

0)

流 み 膚

L

入

魚

拓

魚 コ 回 顔 Ш _ ス 蘇 拓 仕 映 割 モ 2 に 事 つ る ス な 生 終 7 0) 分 修 れ へた 湖 い 羅 뎨 だ つもどこ吹く 心 蘇 Oけ る ح \wedge に 暗 案 とく 抱 釣 Щ < か 瓶 子 に れ 水 落 連 秋 馬 風 澄 L れ 逝 肥 0) め 帰 か け B ゆ n う る る な り

荷 5 を と 見 き に Щ 魚 を 0) 熱 類 < ぞ 献 黍 U あ を ら n

敗

子

渾

身

0)

辻

美

奈

子

熱 芋

Þ

0)

銀

新

宿

0)

端

さ

さ

7

n

せ 穴 留 身 ば に 守 0) B 入 0) 0) 色 る 咲 あ 甚 B い 兵 り 7 水 微 衛 面 に 光 を け 鮫 を ゆ は り あ < 冬 口 B め 薔 遊 う を す に 薇 n

渾 神 2

模 0) 覚 5 り 浦 糊 案 0) ば 酌 を Щ 模 لح 浮 む 子 糊 縁 に 力 仕 と ど 等 が 事 八 級 曼 る を 月 な 珠 せ 過 夜 ど 沙 ぬ ぎ 長 千 要 華 つ に 0) 5 4, 0) H 田 灯 ぬ 畦 り り 百 里

皮

感

秘 色 あ 浦

れ 安

は

終

電

無

月

0)

鉄

橋

を

渡

る

上 谷 昌

五. 杏 草 み 丰 を 笑 は \Box れ 秘 剥 5 0) 0) 色 < 1 V あ つ 自 ラ な け < 足 ク 75 75 か か タ か け な な り 憲

蔓

引

け 去

ば り

含 通

雨

嵐

時

速

ひよんの笛 北川英

子

水

본 力 秋 北舟 伝 遠悼べ 説 原 ざくらさうか 1 逐 き 告 Z 0) ナ ح 父 で 0) か L 別 急 4 明 知 さ に 0) 5 が 掬 うか 黙 刻 ず め ひ り ば V と 1) 7 ぬ 忘 ょ 聞 わ は 葛 h れ き流 零 5 0) 0) る 花 笛 L 雲

石 賞 聞 松 火 庭 受 耳 茸 0) に を < 性 0) 턥 立てて つ は 父 る る い ま 子 ベ 耳 0) で は 相 落 5 0) 秋 伝 短 L 思 0) 歳 0) か 穴 月 余 曼 か 菊 場 燼 珠 秋 作 认 か あ 沙 葉 む な ŋ り 華 雅

縄露み曼供茄

珠 0) 沙 裸 華 0) さ 婦 闍 び 像 0) L 彼 き 方 赤 を 耳 重 澄 ね 谷 ま 合 た ふ す け L

で秋

0)

夜

六

千

余

0)

さ

で

野

と

Þ

月句

明

の厚は

本かか

道なず朝子

名

月

窓

と

Z

窓

に

配

5

7

鱗御鳥

雲御

ど御

のれ

等

<

と

ゆ秋

曼 虫

角

1

た

め

Þ

う

に

Ł

0)

言

Z

新

 $\overline{\Box}$

腐

渡

る

間

隔

並

ぶ

椅

付

さう

言

V

まに

L

た

0)

辺 0) 婦 底 ま 像 言 は で は 百 歩 い ず ょ 閉 り ŧ 7 ぢ 秋 0) 7 人 思 生 は B 7 還 開 赤 0) 夜 < と n 這 h 秋 け 星 ぼ 扇

ŧ

裸地

凝 固 剤

辻

美

子 張 5 草 珠 焼 た 0) 沙 0) い る 真 華 7 に L 中 油 旨 < ば 血 0) に l 5 る 0) 藍 振 畑 繋 \langle を り 畝 が 湯 0) 愛 冬 ŋ 気 餉 す め B 凝 0) 0) な 秋 古 き 衣 寂 茜 剤 被 ぬ り

治

千

でんでら野

田

敬

良 寛 安居正浩

う 秋 コ 水 良 五. 茄 ス 音 ろ 實 合 子 モ Z 庵 を に を ス 雲 恋 S 啉 0) 良 坂 向 と 8 0) 寬 ゆ ば う き あ 0) 堂 る 7> は り Ш ね B は < Ł 高 な 佐 か 揺 れ < 渡 に た れ 下 蓼 を 初 7 る り 背 0) 音 を 紅 す り 簗 に 花

等 身 像 藤 原 照

子

咲

航

裾

雀

投

網

0)

と

<

う

ね

n

け

り

裃 地

薬

鳥 皮 来 葺 7 < を 竹 り 釘 蕉 翁 に 0) 天 等 高 身 像 L

檜 小 稲

鉦 採 大 家 血 吅 族 に 等 た 眼 り 間 0) L 隔 生 お に <u>7</u> ょ 5 疲 ぎ 青 れ 秋 3 け 0) か 雲 h り

男 同 志 松 本 圭 司

ば

フ鳥

新 籍章

柄

に

父

0)

手

0)

艷

秋

蕎の

麦

0)

緑

す

す

る

ح

薫

ŋ

け深

りすら

風自

菊 深 朱 加 0) 人 餐 洒 形 を 小 ŧ 菊 龍 ح 男 馬 着 祈 同 5 7 に お か れ 志 龍 な 7 B 5 さ を 小 h 菊 り 鳥 竹 菊 着 来 せ 0) 人 形 7 春 る

航空ショー

久

染

康

子

空 野 シ \exists 村 1 見 字 る 荒 薄 地 原 野 菊 狐 を 褥 棲 む

ベ < 缶 0) た 酒 前 に 紋 を 0) 荷 真 整 置 h 糸 15 中 7 纏 に 7 他 は 据 郷 菊 ぬ 烈 0) 曼 師 い 秋 珠 ŧ ま 去 沙 煮 つ る 華 会 ŋ

次の音

大

松井志津子

アツ 然 わ + 灘 音 た 薯 た際に ション誌巫女 B を h 漁 る 灯 ح 掘 元 火 次 り L 禄 S 0) 7 7 鳥 音 0) 地 لح 見てをり神の留 暗 獣 ま 震 つ 保 で き な 0) 時 護 梨 き 潮 溜 区 番 位 良 か む 屋 な る 守 板 夜

タ 1 ヤ 圧

州 千

草

甲

花果を次 々 摘 み て 暗 い 籠 急

初

葉 拾

圧

線 実 度

0) に 0)

き

等地

Z 等

木 る

0) る

あ タ る 1

微 ヤ

熱

圧

新

米

0)

積

ま

流 無 れ 星 使ひし 桶は伏せて出 る

栗 原 公 子

佳

きこと

冬瓜汁うやむやといふ逃げどころ かりがねや空の広さを見よとこそ 佳きことの待つ十月のカレンダー

詩

から死へ思ひのめぐる星月夜

喪の帯を手熨斗にたたむ虫しぐれ

翅 水

た 筆

た を

み 残

Z り

満

月

0)

さうな

狭

平 と

な 窮

り 屈

旅

機 ビ

苽 ル

鉛

5 秋

ず 蝶

削 憩 客

敬 車

老 椅

酒

に笑

み

新

酒

に

微

笑翔

先

生 日 子 晴 間

既 視 感 (déja vu)

鳥 居 秀

雄

ビ ホスピスの花壇につづく大花 ビルつなぐ硝子の通路 マラソンのトップ集団 本 ル 郷 跡 に に 既視感湧きてより秋 尾 根 S) 峠 B [曼珠 鳥 星 渡 月 沙 夜 思野 華 る

窮 屈 さう

古 屋

元



能村 選

柿やし、 気 澄 河 腐 学 0) 燕 藪 くことも起承転結 0) 0 . € ッツ め に 夜 B 屋 行く舟に トに詰め込む り佐渡を引き寄す望遠 . 今 日 0) L 教 む 半 掘つて洗つて月を待 づかに暮れ こ の 呑 吉 玻 鉄塔 材どさと小 0) 瑶 揺れなき良夜 世 円 包 目 Ŋ を忘 通 のみをつくし むた 印 形に 勤 からすう る て二人 小銭 る つくつく 手ぶ なごころ 日 野 0) 来る 5 あ な 分 いかな 本 な 鰯 海 る 中 鏡 り つ り Ŧ 大 神奈川 葉 分 鶴見 福 河野美千代 茂 豊 空時 シ 詩 石 高 雁 青 曼 ほばばの畦に繰り出す稲 榴 珠沙 伸 と 刻表になきバスの 人 O渡 4 涼 原 力 裂けこれからは 0) 秋 同 0 に かん幼 神 ペル 華ころびたる咎せざる 血 じ広さの 座 鉄瓶下し 祝 欲 里 婚 る シ 加 冷 煙ただよふ ヤ文様の鐘秋 夜 き 子 へて追 え 仏 花野独り占 粛 が 頃 ても 々にご じむ老支度 来る花野 0) 0) は V たぎ 向 氖 る Ш う り 瓶 澄 行 る 酒 め れ 子 む 傷 崎 和 \mathbb{H} 満

水

月豆青ポ秋秋晩運畑秋竹

長

沖作品 15句選評

* 能村研三

の亡し玻璃いつぱい 0) 雲

河野美千代

も、正木さんの句と同じように悲しいことをことさら強調する と詠んでいるのが、その悲しさを増大させる。なんと美しい空 句ではなく、母が今亡くなった部屋の窓から見える風景を淡々 か読者の心を打つものがある。ところで、この河野さんの句 本当の悲しさが読者に伝わらない。正木さんの句のように必要 なく悲しくて淋しい時に、俳句でその感情をあらわにしては、 があるが、これは俳人正木浩一を詠んだものだが、本当は限り に向っているのだろうと思ったのだろう。 に拡がる鰯雲なのだろう。きっと今旅立った母もあの美しい空 以上に感精をあらわにすることなく淡々と一句に詠むほうが何 正木ゆう子の句に「兄亡くて夕刊が来る濃紫陽花」という句

のもの掘つて洗つて月を待つ

福島

茂

収穫の時期を迎える。月は、ほぼ二十八日で満ち欠けを繰り返 時期は収穫期の始めにあたり、この他にも、いろいろな作物が 月の満ち欠け、あるいはそれを基準とした暦を頼りにしてきた。 種まきや収穫の時期を何時にするか、といったときに、昔から、 古来から、暦として重宝されてきた。農耕では暦が重要で、 中秋の名月に里芋を供えるという習慣がある。 里芋は、

> された作物をお供えして感謝の意を表した。この句では、 いるのも面白い。 的に何の野菜といっておらず、 畑のものと素朴な言い方をして 具体

そういった、農耕に役立ってきた月に感謝の意を込めて、

虫

B わ れ

も 通

手ぶら

鶴見

遊太

まのものを身につけながらも、一本の糸に縋って生きているが、 自宅に持ち込まない姿勢は結構なことである。 が良いのか、どちらが格好がいいのか判定は出来ないが仕事を は持たず手ぶらで自分の体のみで出勤するものもいる。どちら バックを持って真面目そうに出勤するものもいれば、一切鞄類 人間も会社という糸に縋りながら今日も通勤をしている。 サラリーマンの通勤風景を見ていると、しっかりとスー 。蓑虫はありのま

は は 仏 花 充三

があった。 所から私たちを温かく見守ってくれていることへの感謝の思い そこには常に仏が見守ってくれている。神と仏が生活の身近な ように慕ってきた思いがあり、里は正に人々の暮しの場であり、 ない草が花をつける。人々の暮しにとって山は遠くから崇める の暮しの中には神と仏が常に共存していた。秋は山や野に名も 日本は昔から神仏習合の考え方が主流であったようで、

まして、その空間を独り占め出来たらこれ以上の賛沢はないか いが、空と一体となった花野の雄大さがこの句からうかがえる。 と花野が繋がっている。実際は地上と空の広さを比べようがな 空は快晴で真っ青な空が広がっており、遥か彼方の地平線で空 たが、この句も健康的な明るい句である。見渡す限りの花野、 昔、森山良子の歌で「この広い野原いっぱい」という歌があっ 空と同じ広さの花野独り占め 鈴木

も知れない。(以下略